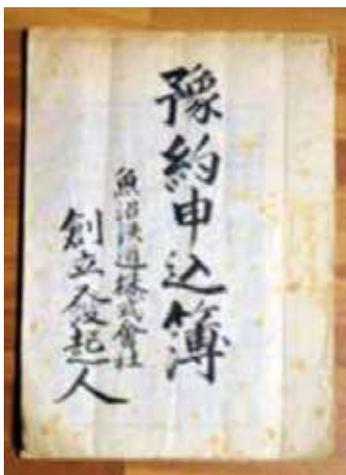


## 資料紹介 『予約申込簿魚沼鉄道』 設立発起人

長岡技術科学大学工学部教授 綿 引 宣 道

## 1. 解題

## 1.1 魚沼鉄道の概要

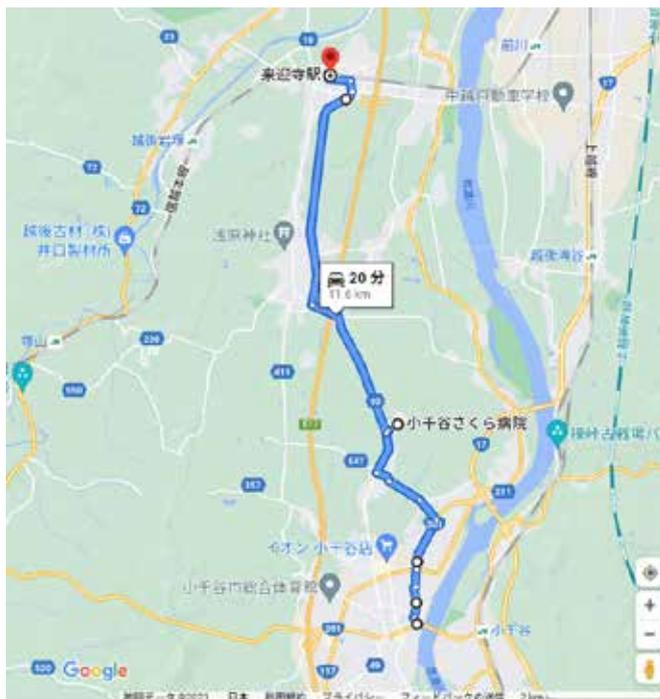


魚沼鉄道は、現在の新潟県長岡市来迎寺にある来迎寺駅（JR信越本線）から現在の小千谷市本町あたりまでつながっていた軽便鉄道であった。僅か11キロ程度の路線で、明治43年5月12日に仮免許状が下りている<sup>1</sup>。明治20年頃から私鉄鉄道布設の全国的鉄道ブームが起き（国土交通省2012：4-5）、それからかなり遅れての開業である。計画当時は、現在の上越線はまだ開通しておらず現在の小千谷駅（できた当時の名称は東小千谷駅）ができたのは大正9年（1920）である。

この魚沼鉄道の開業前は、小千谷の中心部から新潟方面に向かう場合は、信濃川を使った川船あるいは徒歩により来迎寺駅までいくしか

なかった。川船は天候や川の水量に大きく影響し、非常に不安定であった。また、徒歩であっても季節によって大きく差があるが、冬季は1mを越える積雪が3か月以上続くのが通常であり、重量物を大量に移動させることは困難である。魚沼鉄道開通により来迎寺駅で現信越本線を経由して安定的に運べるようになった。

しかし、民営であった期間は極めて短く、大正11年4月10日法律第30号（大湯鉄道及魚沼鉄道買収ノ為公債発行ニ関スル法律）により国有化が決定され、大正13年法律第30号で完了している。仮免許から国有化まで僅か12年であった。



Google Mapにより筆者が作成した

駅名	来迎寺	片貝	高梨	小栗田原	平沢	西小千谷
供用開始	1911	1911	1911	1911	1911	1911
設置終了	1983	1983	1983	1984	1944	1984

<sup>1</sup> 『官報』。1910年10月25日 大蔵省印刷局  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2951556/8>

自動車の普及とともに利用者が減り、昭和58年4月1日に廃線となり線路は撤去され、現在はほとんどが舗装道路になっている。

## 1.2 周辺の人口と産業状況

沿線地域は、来迎寺駅は当時の三島郡来迎寺村、北魚沼郡片貝村、高梨村、平沢村、小千谷町である。

人口は明治41年の『新潟県統計書(教育, 雑之部)』によれば、長岡市(35,304人)、三島郡(98,821人)、古志郡(96,072人)、北魚沼郡(69,763人)である。この辺りは水田と苧麻を用いた繊維産業が主たる産業であった。現在は片貝ガス田があるがこれは昭和59年からの採掘である。

設立趣意に貨物の話題が出てくるものの、具体的にはどのようなものを前提としているかについては本史料に記載がないので、明治44年発行の『魚沼鉄道名勝案内』(小林1991)を見るしかない。これによると、三島郡から南北中魚沼郡を評して「殊に林業、鉱業等は前途頗る有望にして実に新潟県の宝庫とも称すべき地」とある。その一方で、「降雪早く、融雪遅く、加ふるに交通の不便のため、一蚕糸業の外発達の遅々たるは大いに遺憾とするところなりき。」と繊維業以外の産業発展にも貢献する目的であったようだ。この資料と『魚沼鉄道名勝案内』を読む限り、明言はしてはいないものの現在の南魚沼市あたりまで延長するつもりだったのかもしれない。

## 1.3 接続線

開通の準備は進んだものの利便性に大きな問題があった。信越本線は日本国内では標準的な1067mm軌間であるのに対して、魚沼鉄道並びに大正4年に来迎寺から寺泊にかけての長岡鉄道(現在は廃線)が軽便鉄道であるために車両を信越本線に直接乗り入れることができず、一度乗り換えが必要である点と、輸送量が小さい点であった。軽便鉄道は建設と維持費は安くなるものの採算ベースには問題があったようだ。

更に、大正9年に宮内駅(信越本線)―東小千谷駅(現在の小千谷駅:現在の上越線)が、1067mm軌間で開業になった。魚沼鉄道の小千谷駅と東小千谷駅間は1.2キロの道のりである。その後も大正14年には越後湯沢駅までつながり、昭和6年には水上(群馬)までつながった。乗り換えることで東京まで鉄道で行けるようになった。こうして魚沼鉄道は圧倒的に不利になってしまった。

## 1.4 発起人と賛成員

発起人は政治家をはじめとした地元の有志で、主に政治家を中心としている。詳細は本文の注釈で示しているので参照されたい。

表1 発起人の所有株数

発起人氏名	予約申込簿 明治43年(株)	明治44年12月末	持ち株比率 (%)	第6回決算 大正2年6月	持ち株比率
岡田正平	1,000	1,000	25.00	300	7.50
藤田重道	500	100	2.50	0	0.00
木村松二郎	200	251	6.28	50	1.25
小林友太郎	300	50	1.25	50	1.25
中野信吾	250	200	5.00	30	0.75
山本晋	200	10	0.25	10	0.25
高野又七	50	5	0.13	5	0.13
計	2,500	1,616	40.40	445	11.13

小数点以下2位を四捨五入した。

表1を見ると1期後発起人のうち所有株数を増やしたのは、僅か1名で木村松二郎のみであり社長の岡田正平は変わらず、他の発起人は全員所有株数を減らしている。通常は発起人が取締役になる前提であるが、明治44年12月末には、岡田正平（取締役社長）、木村松二郎（専務取締役）、小林友太郎（取締役）の3人のみで、賛成員から清水荘平が加わっている。

さらに6期では増資しているにもかかわらず、発起人は小林友太郎のみ所有株売数が変わらず、他は全員減らしている。経営者層の流出が早くも始まっている。

表2 賛成員の設立1年半後の所有株数

賛成員	第1回決算 持ち株数	明治44年12月末の 持ち株比率 (%)	第6回決算 大正2年6月持ち株数	持ち株比率
増田太平治	150	6.00	150	3.75
高橋九郎	100	4.00	100	2.50
大塚益郎	50	2.00	0	0.00
清水荘平	50	2.00	0	0.00
関矢橋太郎	30	1.20	0	0.00
山田又七	30	1.20	30	0.75
佐藤佐平治	20	0.80	20	0.50
桜井庄平	10	0.40	0	0.00
萩野保吉	2	0.08	2	0.05
平沢幸吉	2	0.08	2	0.05
桜井市作	0	0.00	0	0.00
岡村栄太郎	0	0.00	0	0.00
西脇新次郎	0	0.00	0	0.00
井口勝三郎	0	0.00	0	0.00
西脇寛蔵	0	0.00	0	0.00
宮 尚之	0	0.00	0	0.00
山田由右衛門	0	0.00	0	0.00
大塚定吉	0	0.00	0	0.00
片山清松	0	0.00	0	0.00
小田嶋安兵衛	2	0.05	4	0.10
渋谷喜作	0	0.00	0	0.00
渡辺藤吉	0	0.00	50	1.25
小沢幸次郎	0	0.00	0	0.00
川上佐太郎	0	0.00	0	0.00
岡田龍松	0	0.00	0	0.00
石黒忠憲	0	0.00	0	0.00
西脇済三郎	0	0.00	0	0.00
計	444	11.10	358	8.95

小数点以下2位を四捨五入した。

第1期の賛成員の所有数を見ると鉄道建設には賛同するが資金を出し渋っているのか、主要な議決権を保持する限界まで持ち株数を調整しているように思える。更に6期目になると小田嶋安兵衛が2から4株へ、渡辺藤吉が所有数を0から50株に増やしているが、他に買い増しした賛成員はいない。

発起人と賛成員の出資状況を見ると鉄道事業を言い出したが、どうも本格的に取り組めない状況が発生したものと思われる。

これについて小千谷市史編修委員会(1967:495-496)によると、出資者のうち鉄道布設に積極的な長岡側と消極的な小千谷側では、設立の段階から温度差があり、その上本社の設置場所についても対立があったことが書かれている。結局、小千谷に本社を置くことでまとまった事から、この資料は最終決定案であると考えられる。

本文は手書きの縦書きであるが、印刷の都合上本文では横書きとし、新字体で再現する。

## 2 本文

### 魚沼鉄道株式会社創立趣旨

抑モ運輸交通ノ便否ハ之ヲ大ニシテ国運ノ消長ニ関シ之ヲ小ニシテハ一地方ノ利害ニ係ワルハ敢テ識者ヲ待タスシテ明ラカナリ況ヤ其国ノ文野国勢ノ強弱ハ交通機関ノ具備スルトセサルヲ見テ之ヲ断定スルモノト云フニ於テヲヤ我邦夙ニ爰ニ見ル所アリ孜々トシテ交通機関ヲ完成スルニ勉メ郵便電信ノ制ヲ始メトシ航海事業ノ発達鉄道布設（ママ）ノ経営等年々進歩シ就中鉄道ハ五千哩ノ布設ヲ見ルニ至レリ先ニ政府ハ国家ノ大動脈トモ目スヘキ民設ノ鉄道ヲ買収シ全国ノ鉄道ヲ統一シ一大革新ヲ施シ公衆ノ利便ヲ計ルト共ニ益々鉄道普及ノ方針ヲ立テ已ニ我カ信越鉄道ニ連結スヘキ富直<sup>2</sup>岩越<sup>3</sup>ノ兩線ハ現ニ起工中ニ屈シ近クハ又羽越線ノ起工ヲ見ルニ至ラントスルカ如シ果シテ是ノ三線ノ工事絞功ヲ遂クルニ至ツテハ我カ県下ノ殖産ハ之レニ由ツテ起リ興業ハ之カ為メニ発展シ今日ノ状況ヲ一變スルニ至ルコトハ大ヲ視ルヨリモ明ラカナリ然ルニ越後ノ国タル面積八百二十四方里人口二百万ヲ有シ海陸ノ物産ニ富ムト雖地形三面ニ峻嶺ヲ負ヒ西ハ日本海ニ臨ミ所謂四塞ノ国ニシテ仮令三線<sup>4</sup>ノ貫通スルニ至ルモ之ヲシテ其功用（ママ）ヲ完カラカシメントスルニ適所ニ数条ノ支線ヲ布設シ（平行線ニアラス）幹支線相持ツテ旅客ノ来往貨物ノ集散ノ便ヲ計ル（ママ）ノ必要ヲ感ジ来ルハ最モ視易キノ理ナリ然リ政府カ今季帝国議會ニ輕便鉄道法ヲ提出シテ以テ可決ヲ得タルハ蓋シ民設トシテ支線ニ多ク輕便鉄道ヲ布設セシメ幹線ハ支線ノ力ヲ利用シテ以テ大ニ旅客貨物ヲ吞吐セントスル意ナランカ發起人等モ亦已ニ此意見ヲ抱キ疼クニ本鉄道ヲ布設スルニ意アリシト雖モ戦後財界ノ不振諸般事業ノ計画ヲ阻止スルノ止ナキニ至リ居リシニ今ヤ機運熟シ你魚沼鉄道株式会社ヲ設立シ信越線来迎寺駅ヨリ小千谷ニ達スル輕便鉄道ヲ布設スルニ決シ明治四十三年二月九日ヲ以テ仮免許状下附ノ義ヲ申請シタリ要スルニ本鉄道ハ延長僅カニ約八哩停車場ノ数四カ所工事簡易輕便鉄道ナリト雖モ一旦本鉄道ノ敷設絞功ヲ告ノトキハ是レカ為メニ沿道ハ殖産興業ノ小発達ヲ促カシ殊ニ魚沼三郡ノ如キ毎年冬季中積雪深ク凡ソ三ヶ月間ハ交通ノ意ノ如クナラス車馬ノ力ヲ借ルニ由ナク為メニ商品搬出ノ時機リ誤リ損害ヲ招クコト往々少ナカラサリシモ爾來是等ノ障害ヲ除キ得ルノミナラズ同郡ニ出入リスル貨物ハ益々多ク小千谷駅ニ於テ集散セラレ同地方ヲ殷賑ワシナラシムル等直接間接ノ利益ハ枚挙スルニ遑アラスト雖モ本鉄道ヲ布設シテ最モ公衆ノ利益ナリト感セラレハ既往三年ニ渉ル来迎寺ヨリ小千谷間ニ往来セル旅客及貨物出入ノ数調査シニ一ヶ年ニツキ平均人力車乗用者徒歩旅行者ヲ合シ三十五万九千八百五十人之ニ要セシ旅行費金五万四千二百三十九円穀類雜貨木材薪炭肥料食塩ヲ重（ママ）ナルモノトシ其他数十種ノ貨物ヲ合シ五万三千四百四十五噸（ママ）之カ運賃金九万八千八百七十七円旅客貨物合セテ金十五万三千百十六円ノ巨額ヲ費ササルヲ得サルモ本鉄道ニヨリ同一ノ旅客及貨物噸數ヲ運搬スルニ旅客賃金ハ三万四千七百四十一円八十錢貨物運賃ハ七千四百円五十七錢合計金四万二千百四十二円三十七錢ノ少額ニシテ之レヲ従来ノ運賃ニ比較スレハ金十一万九百七十三円余ノ減少ナリ即チ此減少ハ本鉄道布設ノ結果ニ伴ヒ公衆ニ及スノ利益ト云ハサルヲ得ス而シテ前掲セルニ旅客貨物ノ賃金四万二千百四十二円三十七錢ノ収入ヨリ一切ノ營業費金壹万九千二百三十円ヲ扣除シ利益金二万二千九百十二円三十七錢アリ之レヲ建設資金二十万円ニ對シ年利一割余ニ相当セリ庶幾クハ不肖發起人等ノ本鉄道ヲ布設スルノ趣旨ヲ諒察セラレ賛成ヲ賜ハリ速ニ本会社ノ成立ニ至ランコトヲ

<sup>2</sup> 富山と直江津のこと。

<sup>3</sup> 岩越（がんえつ）鉄道は現在のJR磐越西線のこと。

<sup>4</sup> 羽越本線（明治大正元年開業）、信越線の支線（現在のえちごトキめき鉄道日本海ひすいライン、明治44年全線開通）、上越線（昭和6年全線開通）のことと思われる。

明治四十三年

魚沼鉄道株式会社創立発起人

創立委員長	岡田正平 <sup>5</sup>
創立事務委員	木村松二郎 <sup>6</sup>
	藤田重道
	小林友太郎 <sup>7</sup>
	中野信吾 <sup>8</sup>
	山本 晋 <sup>9</sup>
	高野又七 <sup>10</sup>

賛成員

桜井市作 <sup>11</sup>
高橋九郎 <sup>12</sup>
大塚益郎 <sup>13</sup>
佐藤佐平治 <sup>14</sup>
岡村栄太郎
桜井庄平 <sup>15</sup>

<sup>5</sup> 『日本醸造名鑑』大正14年版によると、中魚沼郡川治村川治の妾有酒造の代表者、『役員録』によれば柏崎にあった大成石油、北越製瓦、中条倉庫、魚沼水力電気の各社で取締役、十日町銀行相談役で中魚沼郡中条村在住とある。大正4に長岡鉄道の取締役になっている。

<sup>6</sup> 坂井(1907)によると九州出身で当時長岡市在住である。『全日本運送業者名鑑』1929年版では寺泊運輸の支店長であった。『長岡鉄道案内』の発行責任者でもある。『役員録』では、北越製瓦の取締役を勤めた。

<sup>7</sup> 小川(1937)によると、1887年に刈羽郡東長鳥村千本木(現・柏崎市)に製油所を建設した。1913年に栃尾鉄道を設立し専務取締役として実務を統括し、1916年に長岡・栃尾間の全通を果たした。『役員録』によると、豊礦石油、東西石油、長岡座の取締役と小林合名会社の代表社員であった。

<sup>8</sup> 鉦山懇話会(編)(1918)によれば中蒲原郡に石油鉦山の所有者となっている。内国石油、明治石油、長岡鉄管、北越石油、日章石油、北越製材、中央石油、新津運輸倉庫、宝井製材、東西石油、中央石油、長岡座、宝山製材、沼垂銀行の取締役、無尽泉石油社長、高津谷石油監査役であった。

<sup>9</sup> 『新潟縣議會史』によると北魚沼郡小千谷町の医師で、1911年から1915年に県議會議員を勤めた。『役員録』では宝山製材の監査役であった。

<sup>10</sup> 『役員録』では小千谷銀行の取締役と監査役、小千谷市史編修委員会(1967:379-391)によると共立小千谷病院設立、小千谷石油、小千谷縮の卸売商を勤めていた。

<sup>11</sup> 『人事興信録(大正5年版)』によると、新潟市在住で東京物産、(合)櫻組各社長、安造社、越後鉄道、新潟瓦斯、新潟製菓の各取締役、新潟貯蔵銀行専務取締役、高田羽二重の監査役、新潟織物の監督、新潟市参事会員を勤めた。『役員録』では、(合)新高商会の代表社員、金丸商会の代表だった。

<sup>12</sup> 衆議院議員を2期務めた。農商務省農務局(1909)によると、三島郡来迎寺村在住地主、『役員録』によると第六十九国立銀行取締役、両毛鉄道(株)監査役と取締役、関原銀行、沼垂銀行、北越倉庫各(株)取締役、与板銀行監査役を勤めた。

<sup>13</sup> (新潟県史編纂委員会2002)によると、第二代県議會議長の山口権三郎の次弟。片貝村の地主大塚氏の養子となる。1881年県議會議員、1891、1902年に三島郡片貝村長を勤めた。『役員録』によると、小千谷銀行、長岡銀行、北越水力電気の取締役を勤めた。

<sup>14</sup> 名古屋商工社(1913)によると、三島郡片貝村片貝の粟守酒本舗の代表者であった。

<sup>15</sup> (新潟県史編纂委員会2002)によると、北魚沼郡小出町大字小出島在住で、銀山拓植を創立し、朝鮮全羅北道に万益北越農場を経営した。小出銀行監査役。1902年から1942年まで町會議員に八回選出。1907、1911年県會議員に当選している。さらに1917年に衆議院選挙当選している。『役員録』小出銀行、越後生糸合同荷造所、小出蚕繭乾燥所、帝国石油の取締役、小出荷為換合資、小出荷為換合の業務担当社員であった。

関矢橘太郎<sup>16</sup>  
清水莊平  
増田太平治  
西脇新次郎<sup>17</sup>  
井口勝三郎<sup>18</sup>  
西脇寛蔵<sup>19</sup>  
宮 尚之  
山田由右衛門<sup>20</sup>  
萩野保吉  
平沢幸吉  
大塚定吉<sup>21</sup>  
片山清松  
小田嶋安兵衛<sup>22</sup>  
渋谷喜作  
渡辺藤吉<sup>23</sup>  
小沢幸次郎<sup>24</sup>  
川上佐太郎<sup>25</sup>  
山田又七<sup>26</sup>

<sup>16</sup> 『新潟県議会史』によると、1894年北魚沼郡下条村長となった。1894年から1907年県議会議員、1897年北魚沼郡議会議員、1901年広瀬村立村に当たり村長事務取扱、1908年5月第十回衆議院議員選挙に当選する。明治14年、地域の人々の冬季副業のため殖産会社（機織工場）を設け、1897年小出病院創設に尽力し、後年銀山拓殖会社役員となる。日本石油役員に就任した。さらに『役員録』で小出銀行取締役、越後生糸合同荷造所監査役を勤めた。

<sup>17</sup> 日本風土民族協会 編（1938）によると先代の西脇新次郎の長男で、北魚沼郡小千谷町本町在住、西脇商店と中野酒造、小千谷銀行、越後製糸の取締役を務めた。『役員録』小千谷銀行、銀山拓殖の取締役であった。

<sup>18</sup> 小千谷銀行、小千谷真田(株)の取締役であった。

<sup>19</sup> 『役員録』小千谷銀行、新潟銀行の取締役であった。

<sup>20</sup> 名古屋商工社（1913）によると醤油醸造業を営んでいた。

<sup>21</sup> 第四国立銀行の創立時の定款によると北魚沼郡小千谷町住、第四銀行の設立の株主、『商工名鑑』では、小千谷町内で小村屋（薬種他）を経営。

<sup>22</sup> 帝国飲食料新聞社（1916）によると洋酒缶詰薬種商を営み、運送計算所（1929）によると小千谷合同運送(株)の代表、商工省 編（1931）によると小千谷真田会社の代表であった。

<sup>23</sup> 坂井（1907）によると、宝田石油専務取締役、ゴム新報社 編（1913）によると長岡市観光院町住、『役員録』では六十九銀行、京越石油、宝田石油、長岡興業、長岡製油所、新津石油、小口給水、高田機業、国油共同販売所の取締役、宝扇石油商会の業務担当社員を勤めた。

<sup>24</sup> 坂井（1907）によると中越貯蓄銀行専務取締役を、この他長岡市議会議員でもあった。

<sup>25</sup> 1920年に長岡市議会議長、名古屋商工社（1912）によると、米穀肥料商の河佐商店の代表、『役員録』長岡米穀取引所の仲買人、中越酒造、中越貯金銀行、高津谷石油、長岡米穀株式石油取引所、長岡興業、長岡倉庫、北越倉庫、長岡羽二重、日本金鑛の取締役、蔵王石油、宝田石油監査役を勤めた。

<sup>26</sup> 新潟県議会史編さん委員会（2002）では、県議会議員、衆議院議員、寶田石油株式會社長、大阪點燈株式會社取締役、北越製紙株式會社、株式會社中越銀行、日出生命保險株式會社、株式會社北越新報社各監査役、長岡商業會議所議員、『役員録』によると、高津谷石油、明治石油、日之本石油、明栄石油、明益石油、扶桑同盟、古志宝田石油、高山石油、扶桑共同石油、渡部石油、日本製油、長峰鉄管、比礼石油、中越貯金銀行、柏崎石油、国油共同販売所、西田川塩炭、寶井製材の取締役、北越製紙、北越新報社監査を勤めた。

岡田龍松<sup>27</sup>

一国ヲ縦通スル鉄道アルモ之ヲ連続スル交通運輸ノ機関ナケレハ鉄道ノ効ヲ奏スルヲ能ハス来迎寺  
駅ト魚沼郡トノ交通ニ之ヲ連接スル鉄道ノ計画ハ予ノ大必要視シテ賛成スル所也

男爵 石黒忠恵<sup>28</sup>

西脇濟三郎<sup>29</sup>

起業目論見書

壹 目的

軽便鉄道ヲ布設シ一般旅客並ニ貨物ノ運送ヲ營業トス

貳 商号及本社設置地

魚沼鉄道株式会社ト称シ本社ハ新潟県北魚沼郡小千谷町ニ設置ス

参 線路ノ起点及終点並ニ其経過スヘキ地名

起点ハ新潟県三島郡来迎寺村ニシテ同郡片貝村北魚沼郡千田村ヲ経テ終点ハ同郡城川村ニ至ル

四 鉄道ノ種類及軌間

軽便蒸気鉄道ニシテ軌間ハ二尺六寸トス

五 資本金ノ総額

金貳拾万円

六 株式ノ総数及壹株ノ全額

株式ノ総数ヲ四千株ニ別チ壹株ノ全額ヲ五拾円トス

七 会社ノ存立期限

会社ノ存立期限ハ定メス

八 発起人ノ引受クヘキ株式ノ総数ハ貳千五百株トス

九 発起人ノ氏名住所及発起人引受株式ノ数

新潟県中魚沼郡中条村大字中条一番戸

一壹千株 岡田正平

東京市小石川区小石川原町七貳番地

一五百株 藤田重道

新潟県長岡市城内町一丁目六百三十四番地壹

一貳百株 木村松二郎

新潟県長岡市城内町一丁目七百五十番地

一参百株 小林友太郎

新潟県長岡市東阪ノ上町六百五十八番地

一二百五拾株 中野信吾

新潟県北魚沼郡小千谷町八百八十二番戸

一貳百株 山本晋

新潟県北魚沼郡小千谷町九百六十九番戸

一五十株 高野又七

<sup>27</sup> 新潟県議会史編さん委員会 (2001) によると、柏崎県第5区副戸長 (1875年)、新潟県第12大区長 (1879年)、中魚沼郡長 (1881年)、新潟県会議員、徴兵参事員、1897年には中魚沼郡会議員となり、議長代理を勤めた。『役員録』によると北越撚糸の取締役、十日町銀行頭取、大成石油監査役を勤めた。

<sup>28</sup> 石黒 (1936) の彼自身の著作『懐舊九十年』によると父の姉が嫁いでいた越後国三島郡片貝村 (今の新潟県小千谷市) の石黒家の養子となり、日本陸軍軍医、日本赤十字社社長を勤めた。

<sup>29</sup> 新潟県農林課 (1921) によると、小千谷町内の地主であった。

仮定款

総則

- 第一条 本公司ノ目的ハ新潟県三島郡来迎寺村ヨリ同郡片貝村北魚沼郡千田村ヲ経テ同県同郡城川村ニ至ル間軽便鉄道ヲ布設シテ蒸気列車ヲ運転シ一般旅客並ニ貨物ヲ運送シ其運賃ヲ収受ス
- 第二条 本公司ハ魚沼鉄道株式会社ト称シ本社ヲ新潟県北魚沼郡小千谷町ニ設置シ便宜ノ地ニ支社及出張所ヲ設置スルコトアルヘシ
- 第三条 本公司ハ株式組織トシテ資本金式拾万円トス
- 第四条 本公司ノ存立期限ハ定メス
- 第五条 本公司ノ広告ハ本社及支社所在地管轄区裁判所ノ登記広告ヲナス新聞紙ニ登載ス

株式払込

- 第六条 本公司ノ株式ハ壹株ノ金額ヲ金五拾円トシ其株数ヲ四千株トス
- 第七条 本公司ノ株券ハ総テ記名式トシ壹株、五株、拾株ノ三種トス
- 第八条 本公司ノ株金五万円ハ総株式引受者確定後参週間以内ニ發起人ノ通知ニ依リ払込ヲナシ残額金拾五万円ハ必要ニ応シ取締役会ノ決議ヲ以テ其払込ムヘキ金額及期日ヲ定ム
- 第九条 本公司ノ株金払込期日ニ至リ払込ヲ怠リタルモノハソノ翌日ヨリ百円ニ付金五銭ノ割合ヲ以テ利息ヲ納ムヘシ若シ払込期日後三十日ヲ経テ尚払込ヲナサザルトキハ会社ニ於テソノ株式ヲ公売シ欠代金ヲ以テ遅延シタル払込金ノ利息並ニ之カ為メ生シタル諸費用ニ充テ尚不足アレハ追徴シ剰余アレハ之ヲ返付ス
- 第拾条 本公司株式ヲ売買譲与スル時ハ其株券裏面ニ双方記名ニ捺印シ且ツ連署シタル書換請求書ヲ添ヘ名義諸替請求書ヲ添エ名義書換ノ請求スヘシ本公司ハ之ヲ株主名簿ニ登録シテ其権利ノヲ証明ス但相殺ニ因リ名義書換ヲ乞フ時及氏名ヲ変更シタルトキハ戸籍吏ノ証明書ヲ遺贈及裁判ノ結果ニ因ルトキハ其事項ノ證スヘキ書類ヲ添付スヘシ本条ノ場合於テハ券壹通ニ付キ金五銭ノ手数料ヲ徴収ス
- 第拾壹条 本公司ノ株主其所有株券ヲ損傷シタルトキハ申出ニ従ヒ損傷券引換ニ新券ヲ交付スヘシ若シ総（ママ）失焼亡シタルトキハ三名以上ノ確實タル証人達署之上其番号枚数及総（ママ）失若シクハ焼亡シタル事由ヲ本公司ニ申出ヘシ本公司ハ本人ノ費用ヲ以テ参日以上其旨ヲ新聞紙ニ広告シ六拾日以内ニ発見セラルトキハ新券ヲ交付スヘシ本条ノ場合ニ於テハ株券壹通ニ付金式拾銭ノ手数料ヲ徴収ス
- 第拾貳条 本公司ハ定時株主總會前三十日以内ニ相当ノ期間ヲ定メ株券名義ノ書替ヲ停止ス但此場合ニハ壹週間前ニ之ヲ広告スヘシ
- 第拾参条 株主ハ住所及印鑑ヲ会社ヘ届出スルコトヲ要ス其氏名住所印鑑ヲ変更シタルトキ又ハ同シ

株主總會

- 第拾四条 通常總會ハ毎年五月十二月之ヲ招集ス臨時總會ハ必要ニ除シ之ヲ開ク
- 第拾五条 總會ニ於テ資本金五分ノ壹以上ニ当ル株主出席セサレハ決議ヲナスコトヲ得ス
- 第拾六条 株主ハ總會ニテ其所有壹株毎ニ壹個ノ議決権ヲ有ス
- 第壹七条 株主ハ代理人ニ委託シテ議決権ヲ行フコトヲ得ルモ其代理人ハ本公司ノ株主ニ限ルモノトス
- 第壹八条 總會ノ議長ハ必要ノ場合ニ期日ヲ定メ會議ヲ延期シ又、会場ヲ移スコトヲ得但延期會ニ於テハ、前會ニ於テ決議シ終（ママ）ニケル事項ノ外他議ニ亙ルコトヲ得ス
- 第壹九条 總會ノ決議ハ之ヲ決議録ニ記載シ議長及出席株主式名以上ノ連印ヲ得テ保存スヘシ

役員及権限

- 第式十条 本公司ノ役員ハ取締役五名監査役参名トシ取締役ノ互撰ヲ以テ社長壹名専務取締役壹名ヲ置ク
- 第式拾壹条 本公司ノ取締役ハ本公司ノ株式五拾株以上監査役ハ参拾株以上所有スル株主中ヨリ撰挙ス
- 第式拾貳条 本公司役員ノ任期ハ取締役参ケ年トシ監査役ハ壹年トス若シ任期ノ通常総会開期ト副ハサル場合ニ於テハ任期ヲ短縮シ満期前ノ通常総会ニ於テ之ヲ改撰ヘシ但シ共ニ再撰ニ因リ重任スルコトヲ得
- 第式拾参条 本公司ノ取締役ハ其任期中各自所有ノ本公司株式五拾株ヲ監査役ニ供託スヘシ
- 第式拾四条 本公司ノ役員ニ欠員ヲ生シタルコトアルモ法定ノ数ニ欠ケタルコトナキ限りハ次期ノ総会マテ補欠選挙ヲ延期スルコトシ得
- 前項ノ株券ニ取締役退職後ト雖モ株主総会ニ於テ在任中ヲ計算報告シ承認シタル後ニアラサレナ之ヲ取り戻スコトヲ得ス但シ補欠撰挙後任者ノ任期ハ前任者残任期間トス
- 第式拾五条 役員ニハ年俸ヲ給ス ソノ全額ハ株主総会ノ決議ニ依ル
- 第式拾六条 社長ハ会社ノ社長ハ会社ノ事務ヲ統理シ法律命令定款株主総会及ヒ取締役会ノ議決ニ依リ業務ヲ執行シ且ツ株主総会及取締役会ノ議長タルベシ
- 第式拾七条 専務取締役ハ取締役会ノ議決ヲ執行シ社務ヲ整理シ社長ノ事故アルトキ之ヲ代理ス

計算

- 第式拾八条 本公司ノ計算ハ壹ケ年ヲ式期ニ分チ毎年四月及拾月ノ終リニ決算ヲナシ每期総収入金ヨリ営業上ノ諸経費ヲ扣除シタル残額ヲ利益金トシ之ヲ左ノ如ク分配ス
- 利益金百分ノ五以上 法定準備積立金
- 同 百分ノ五以上 別途準備積立金
- 同 百分ノ拾以下 賞与金
- 残金 配当金
- 但シ配当ノ都合ニ因リ後期へ繰越金トナスコトアルヘシ
- 第式拾九条 株主トシテ配当後参ケ年ヲ経ルモ配当金受ケ取ラサルモノハ会社ノ所得トス

雑則

- 第参拾条 本公司ノ印章ハ左ノ如シ
- 魚沼鉄道株式会社 魚沼鉄道株式会社印 社長印 専務取締役印
- 第参拾壹条 官庁へ宛テタル文書又ハ報告書株券手形及会社ニ於テ権利ヲ得義務ヲ負フベキ一切ノ書類ニハ社名及社印ヲ用ヒ社長マタハ専務取締役ハ之ニ捺印スルモノトス
- 第参拾貳条 本社定款ニ規定ナキモノハ総テ商法其他ノ法令ニ従フ
- 第参拾参条 本公司ノ負担ニ帰スベキ設立費用ハ金貳千円トス

敷設費用概算書

- |             |       |
|-------------|-------|
| 一金六百参拾貳円    | 測量設計  |
| 一金六千参百二拾円   | 工事監督費 |
| 一金壹万九千百貳拾五円 | 用地費   |
| 一金四万八千七百五拾円 | 土工費   |
| 一金九千百五拾円    | 橋梁費   |
| 一金四千八百円     | 溝渠費   |
| 一金貳千円       | 伏樋費   |

一金参万五千円	軌道費
一金壹万貳千円	停車場費
一金貳万八千円	車両費
一金貳千五百円	器械費
一金四千五百円	建築用汽車費
一金貳千円	用具費
一金三百円	柵垣及境界杭諸標費
一金貳千円	電話費
一金貳千円	運送費
一金五千円	惣掛費
一金八千九百貳拾参円	予備費
計金拾九万参千円	
外	
金五千円	営業資金
金貳千円	創業費
計金貳拾万円	

調査主任  
技師 森嶋収六 ㊞

運送営業修士概算書

一金四万貳千百四拾貳円参拾七銭 惣収入

内訳

金参万四千七百四拾壹円八拾銭	旅客収入
金七千四百円五十七銭	貨物収入

一金壹万九千貳百参拾円 惣支出

内訳

金五千五百四拾円	保存費
金八千六百九拾円	運転費
金五千円	惣掛り費

差引

金貳万貳千九百壹貳円参七銭

即ち資本金貳拾万円ニ対スル壹割壹分四厘五毛強ニ相当ス

調査主任  
技師 森嶋収六 ㊞

貴会社定款及前記之事項承認之上頭書之株式引受申候ヤ

## 引用文献

赤沼信東 (1912), 『長岡市会議員評論』, 大坂屋書店

石黒忠憲 (1936), 『懐舊九十年』, 博文館

運送計算所 (1929), 『全日本運送業者名鑑』, 運送計算所

小千谷市史編修委員会 (1967), 『小千谷市史』, 下巻, 小千谷市

小千谷市文化財協会編 (1984), 『小千谷文化』, 第97号

小川金治郎 (1937), 『小林友太郎翁伝』, 小林翁銅像維持会

木村松二郎編 (1916), 『長岡鉄道案内』, 長岡鉄道

鉦山懇話会 編 (1918), 『日本鉦業名鑑』, 鉦山懇話会

小林良平 (1911), 『魚沼鉄道名勝案内』, 魚沼鉄道

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/764485/128> (国会図書館デジタルコレクション)

国土交通省 (2012), 『鉄道史』, 国土交通省

<https://www.mlit.go.jp/common/000218983.pdf>

ゴム新報社 編 (1913), 『大日本護謨同業名鑑』, ゴム新報社,

坂井雲舟 (1907), 『訪問記』, 速報社,

商工省 編 (1931), 『全国工場通覧. 昭和6年』, 日刊工業新聞社

日本風土民族協会 編 (1938), 『越・佐傑人譜. 昭和14年度版』, 出版者日本風土民族協会

高橋虎編 (1962), 『人間岡田正平』, 岡田正平翁遺徳顕彰会

帝国飲食料新聞社 (1916), 『帝国飲食料同業名鑑. 大正5年調』, 帝国飲食料新聞社

鉄道省 編 (1921) 『日本鉄道史. 上篇』, 鉄道省

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2127152> (国会図書館デジタルコレクション)

名古屋商工社 (1912), 『商工名鑑』 名古屋商工社

新潟県議会史編さん委員会 (2001), 『新潟縣議會史：明治篇一』, 新潟県議会

新潟県議会史編さん委員会 (2002), 『新潟縣議會史：明治篇二』, 新潟県議会

農商務省農務局 (1909), 『農務彙纂 第5；地主ト小作人』, 農商務省農務局

松本和明 (2018) 「木村松二郎の足跡と活動(I)」 『長岡郷土史』, 第55号, 岡郷土史研究会, p209-218

新潟県農林課 (1921), 「地価一万円以上所有地主調」, 『都道府県別資産家地主総覧 新潟編』

日本図書センター 1998年復刻版

## 謝辞

この資料は、ホクギン経済研究所資料室に所属していた高野莊平氏の個人所有の資料を貸していただきました。

また、(公財)高橋産業経済研究財団には資金援助を頂きました。

ここにお礼を申し上げます。